

2013年10月30日

シンポジウム：金融システムの安定性と金融業の競争

佐々木百合論文

『裁量的政策の貸出行動への影響』 へのコメント

大阪大学 社会経済研究所 小川一夫

1. 論文の貢献

- 自己資本比率規制を上昇させるための銀行による裁量的政策の包括的な説明
- 裁量的政策によって銀行の貸出行動がどのような影響を受けたのか、パネルデータによる実証分析（1994-2002年）
- 貸出行動と並んで劣後債の発行行動も分析されており、裁量的政策間の関係に検討が加えられている（資本金、公的資金と劣後債の代替関係）

2. コメント

- 自己資本比率規制は、果たして金融システムの安定化につながっているのか

① Procyclicality

実証分析では「有価証券含み益」、「土地再評価益」が貸出を増加させるという結果が得られている

景気拡大期には資産価格上昇により、自己資本比率が高まり、貸出が増加する。逆に景気後退期には資産価格下落により、貸出が減少する。このように自己資本比率規制は景気変動の増幅効果がある

② リスクテイクへの影響

裁量的政策によって銀行の資産選択行動全般にはどのような変化が見られるのか？

自己資本比率の低下局面では、貸出を減少させてリスクウェイトの低い国債の保有を増やすことで、低下を食い止めることができる。

90年代後半における銀行による国債保有の急増は自己資本比率規制によって説明可能か？

貸出のみならず資産選択全般への影響に関する実証研究の必要性

➤ 「貸し渋り」 vs. 「追い貸し」

実証結果からは自己資本比率規制による「追い貸し」は発生しなかったといえるのか？

Peek and Rosengren(2005)AER によれば、自己資本比率をぎりぎりクリアしている銀行ほど追い貸しを行う傾向が観察される。

大手行と中小行によって貸出行動の違いがあるのではないか。また、「中小企業向け貸出」と「大企業向け貸出」では裁量的政策に対する反応が異なる可能性。

➤ 貸出における需要要因の重要性

貸出方程式においては、説明変数として裁量的政策変数、貸出金利、タイムダミーが選ばれているが需要要因がコントロールされていない

➤ 貸出金利式の識別性

貸出金利式は、貸出金利を貸出残高のみによって説明しており、貸出方程式と識別できていない？（貸出金利式はなくてもよいのでは）

➤ **バーゼルⅡが貸出行動に与える効果の検証**

標本期間は1994~2002年で最近時点までカバーされていない。

2007年度からはバーゼルⅡが実施されており、標本期間を延長して、銀行の資産選択への効果を分析してもらいたい

- ・オペレーショナル・リスクの影響
- ・信用リスク算出において、貸出債権の信用力に応じてリスク・ウェイトの細分化